

3 リニュロン水和剤の畦間・株間処理による大豆広葉雑草の防除効果

ねらいと成果

大豆栽培において、除草剤や中耕培土による生育初期の雑草防除効果が十分でない場合があり、広葉雑草が収穫期まで繁茂するほ場が増えつつある。そこで、土壌処理¹効果と茎葉処理²効果を併せ持つリニュロン水和剤を大豆の生育期に畦間・株間処理したところ、既存の広葉雑草の防除と同時に土壌処理効果が発揮されることで抑草期間が長く保たれ、その結果、収量も十分確保できることを明らかにした。

内容

除草剤を用いた大豆生育期の広葉雑草防除方法にベンタゾン液剤の茎葉処理があるが、ヒユ科やナス科等の一部の草種に対して防除効果がかなり劣る。一方、非選択性茎葉処理剤による畦間処理（図1）では、作物体の茎葉に付着すると薬害が生じるので株基部まで十分に薬剤処理しにくく、株間に残草するおそれがあり、処理後に発生する雑草に対する防除効果もない。そこで、土壌処理効果と茎葉処理効果を併せ持つリニュロン水和剤の畦間・株間処理（図2）の効果について検討した。

処理方法は、6月25日に播種（条間75cm）した大豆の本葉3～4葉期にリニュロン水和剤200g

/10a（散布水量100L/10a）を畦間から株基部にかけて散布した。処理時の雑草の草高は、大豆の株基部で5cm程度であった。比較として、リニュロン水和剤200g/10aの播種直後土壌処理区、グルホシネート液剤300ml/10aの畦間処理区、ベンタゾン液剤150ml/10aの畦間・株間処理区を設けた。

リニュロン水和剤播種直後土壌処理区の処理40日後並びにグルホシネート液剤畦間処理区及びベンタゾン液剤畦間・株間処理区の処理20日後における残草調査では、ホソアオゲイトウとアメリカイヌホオズキの残草がみられたのに対し、リニュロン水和剤畦間・株間処理区では残草がなく、高い防除効果が認められた（図3）。また、収量についてみると、リニュロン水和剤畦間・株間処理区が最も多かった（図3）。

普及上の注意事項

リニュロン水和剤は、本葉に薬剤が付着すると褐変等の薬害が生じるが、下位葉への付着が軽微であれば減収は認められていないので、作物体の株基部まで十分に散布する。

株基部への散布精度を確保するためには無培土栽培が望ましい。

牛尾 昭浩（農産園芸部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）

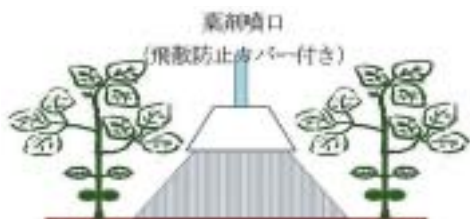


図1 大豆畦間への除草剤処理
（作物に薬剤が付着ないように散布する）

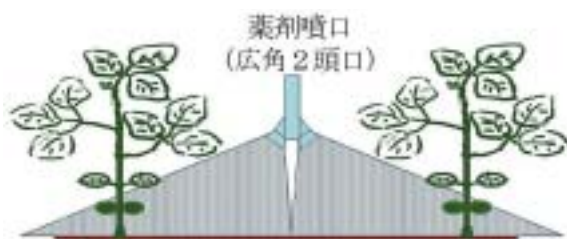


図2 大豆株間への除草剤処理
（作物の株基部にも薬剤を散布する）

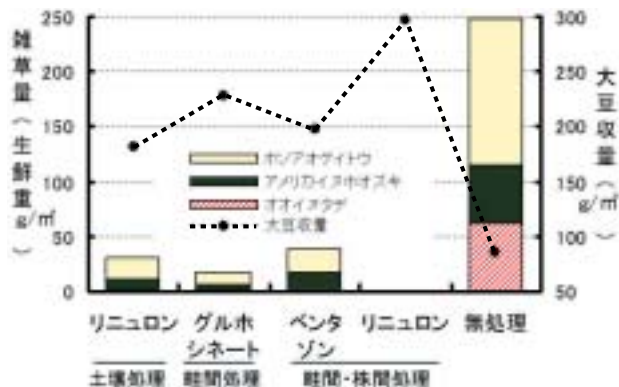


図3 薬剤や散布方法の違いによる広葉雑草の発生状況
（6/25播種、条間75cm、7/15畦間処理、8/4調査）